

二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版



淫辱の魔法捜査官  
羞恥淫辱24時

小説 上田ながの

挿絵 ばくちん

第一話	魔法捜査課黒羽紅音	006
第二話	潜入せよ、権名姉妹	056
第三話	神林由梨絵の憂鬱	088
第四話	マジックいっちゃん	124
第五話	正義より性戯がいいよねやっぱ	157
第六話	監禁と豚	183
最終話	物凄い悪魔	214

# 登場人物紹介

Characters



くろはねあかね  
**黒羽紅音**

魔法捜査課課長。見た目は少女だが実年齢は不明。強気な性格で、捜査においては現場第一主義を貫く。少女体型のため胸はべったんこ。



きりたにみさと  
**桐谷美里**

かつては魔法捜査課に所属していた四十八曲署の署長。正義感が強く、署内での信頼も厚い。大事件の際は自ら陣頭指揮を執る。



かんばやしゆりえ  
**神林由梨絵**

紅音の下で働く魔法捜査課職員。生真面目な性格で、主に調査や分析などのデスクワークを行なう。彼氏持ち。



はやかわまもる  
**早川守**

四十八曲署に所属する刑事。魔法捜査課とも関係が深い。

みずしま  
**水嶋いずみ**

連続婦女暴行事件の被害者。四十八曲署に保護されている。

えどがわしんいち  
**江戸川真一**

由梨絵の恋人。探偵をやっている。



しいなつばき  
**椎名椿**

魔法捜査官。双子の姉。明るい性格で誰とでも仲良くなれることから潜入捜査を得意とする。桜とは互いを察知する同調が可能。

しいなさくら  
**椎名桜**

椿の双子の妹に当たる捜査官。姉とは対照的にやさぐれた性格。胸も姉とは対照的に小さい。眼鏡にポニーテールがポイント。

「勿論。こんな嘘つく必要ないでしょ。なあ……えーと、名前はなんだっけ？」

「……あ……あか……ねじゃ……」

名を問われ、素直に答えてしまう。不甲斐無い自分の身体が憎らしかった。

「そうそう、紅音だ。ふふ、これから皆さんに素晴らしい差し入れをさせていただきます。さあ、紅音。これからこの皆さんに奉仕をして差し上げるんだ」

「——ほ、奉仕じゃと!？」

八百余年も生きているのだ、奉仕の意味は分かっってしまう。一瞬で顔が真っ赤に染まる。「で、でも本当にいいのか？　こ、こんな娘に……」

紅音の見た目も相まって、流石に浮浪者達も躊躇しているようだった。が、男は「問題ありません」とにこやかに笑う。

「この娘は見た目に反してとても淫乱なのですよ。例えば……紅音、僕のペニスを舐めるんだ」

ザワッ!

言霊が小柄な身体を襲う。全身をワイヤーで締め上げられるかのような感覚が走った。

「な！　貴様——やめっ!」

男の魔力は紅音に勝る。流れ込む言霊に肉体はあっさりと掬め捕られ、少女刑事は敵の前で跪ひざまずくことになってしまった。ズボンに隠された股間が、丁度顔面に位置する。

「こ、このようなこと……せ、絶対に許さんぞ貴様!」

「怒鳴るなよ。そんな状態じゃ説得力がまるでないぞ」

笑う男の言葉通り、意思に反して動く肉体が、勝手に男のズボンを下ろし始めてしまう。ベルトを外し、下着を露にする。下着の上からでもはつきり形が分かる程、まだ勃起もしていないというのに男の肉棒は大きかった。

「く、くそ……。このような屈辱……」

眉根に皺を寄せ、不快感を露にしながら、伸ばす手で下着の上からペニスを撫でる。布越しに男根の生温かさが伝わってきた。

ゆっくりと、優しく、愛しい恋人のペニスを扱うような手の動きに、浮浪者達が「オオッ！」と歓声を上げる。

(こ、この私が……。このような若造に……)

すべてにおいて自分自身が勝っている筈だった。本来の力さえ出せれば、現在かけられている程度の言霊など、簡単に振り切ることができる。だというのに、現実は……。

撫で摩るうちにペニスは勃起を始める。柔らかかった肉茎が反り返り、ビクンビクンと痙攣を始めた。下着が内側から持ち上がり、近付けていた紅音の頬に触れる。

「さあ、直接奉仕するんだ」

「誰がそのようなことを！」

口では抵抗して見せても、身体は言うことを聞いてくれない。両手でパンツのゴムに指をかけ、一気に引き下ろす。途端に下着の拘束から解放された肉棒がビヨンッと勢いよく

そそり勃った。カリ高のペニス。肉棒の生臭さが鼻をつく。

「け、汚らしいモノを見せるな！」

顔が真っ赤に染まった。

「自分で脱がしといてそれかよ。説得力がないよお嬢ちゃん」

ゲラゲラと周囲を囲む男達が笑う。確かに彼らの言う通りだった。何もできない自分が情けない。

「さあ、さっさと奉仕を始めるんだ」

魔女の屈辱を男は理解しているのだろう。口端を歪め、サディスティックに笑った。

紅音は命令されるがままに肉棒に触れる。熱気が掌を通して伝わってきた。ゴツゴツとした肉の感触が不快この上ない。先端部の肉傘が広がり、鈴口からは粘着質なカウパー液が分泌されている。鼻をつく牡の発情臭に、紅音の思考がクラクラ揺れた。

「どうした？ やっぱり女の子には刺激が強すぎたかな？」

「だ、黙れ！ このような粗末なモノ……な、何ほどのことがある！」

幾百年も生きてきたのだ。肉棒を見るのがまったくの初めてというわけでもない。

（この程度の屈辱。私には何の関係もない。少し我慢する。それだけだ。見ておれ、絶対に後悔させてくれる……）

ほんの僅かな時間屈辱に耐えれば、必ず椿や桜が見つつけ出してくれる。だからこの程度の屈辱は気にするまでもない筈なのだ。

少女魔女は自分自身に言い聞かせながら、触れる肉棒を抜き出す。

親指と人差し指で輪を作り、肉茎から肉先までを撫でていく。カリ首をキュッと締め上げながら、指先で亀頭秘裂をなぞった。

ちゅく、しゅこしゅこしゅこ……。

(ぐ、ぐちゃぐちゃしておる……。ぬ、ヌルヌルした液体が私の指に絡む……)

分泌されていた先走り汁が指先に纏わりつく。半透明の糸が指と指の間に伸びる。ネチャネチャと音が響く。想像していた以上に気色が悪い。

「ほら、もっと激しくしてくれないと」

「う、五月蠅い！」

怒鳴りながら、言われるままに扱く速度を上げていく。捌め捕った牡汁を亀頭に塗りたくり潤滑液とした。

じゅく、くちゅぐちゅ……。じゅぐう……。

カウパー液が肉茎を湿らせ、月明かりを反射してヌラヌラ輝く。

「おいおい、本当に積極的だな。あ、あんな女の子なのに本当に淫乱なんだ」

「たまんねー！」

股間を押さえて男達が騒いだ。耳に届く卑猥な蔑みが痛い。

「黙れ！ わ、私は淫乱などでは——」

「次は舐めろ」

「え!? あ、だ、駄目だ! やめ——ん、うえ、に、苦い……」

ちゅ、ちゅぶ、ちゅちゅちゅ……。

顔がペニスに寄っていく。ゆつくりと呼吸するように動く肉棒へと、舌が勝手に伸びてしまう。ピンク色の柔肉が軟体動物のように蠢き、鈴口を突く。プチュ、レロレロと舌先が汁塗れになった亀頭に触れ、味覚が痺れるような苦味が伝わってきた。

「ま、まず——んちゅ、んちゅう……やめつよと、い、いっておっる! ん、んんん!」  
文句を言いながらも、ミルクを飲む犬のようにぴちゃぴちゃ舌を動かし続ける。一舐めするたびに、肉胴が嬉しそうに微振動するのが伝わってきた。

舌の動きに合わせて小さな頭が前後に振られ、小柄な身体が揺れる。ひらひらとスカトが舞い、白い太股が覗き見えた。冷たい空気が下腹部に吹きかかる。気色悪さと肌寒さでプツプツと柔肌に鳥肌が立つ。

「お、おい……。も、もう我慢できねえ。俺達にも楽しませてくれるんじゃないのかよ!」  
積極的に舌を動かし、グロテスクな肉棒に奉仕をする少女の姿に、見物人達の我慢も限界に達しているようだった。

「ん? ああ、そうだな。それじゃあ紅音……彼らには手で奉仕してあげなさい」

「この……げ——んじゅっ——すがっ!」

赤い瞳に憎しみの光を灯しながら、両手を伸ばす。これを見た浮浪者のうちの二人が、我慢できないといった様子で下半身を晒し、紅音を挟むように左右に立った。余った一人



も肉棒を出そうとするが「お前は後だ」と言われて渋々引き下がる。

魔法使いの男程の大きさではないが、勃起したペニス突きつけられた。全然洗っていないのだろう。亀頭には恥垢がこびりつき、嗅ぐだけで吐き気を催させるような悪臭が魔法女の鼻をついた。

「んじゅっ！ くふっ！ み、見せるな！ そのようなモノ、早く仕舞え！」

と言いつつも、伸びた腕は肉棒を握る。陰茎にこびりついた汚れと、掌に絡みついたカウパー液が触れ合い、ぐちゅりとくつつく。指が亀頭に触れると黒く変色しかかった黄色い恥垢がポロポロと剥がれ落ち、掌に張りついてきた。

「んぶあっ！ は、はな——離れよ！ わ、私は魔捜だぞ！ 逮捕されたいのか！」

不浄な感触に顔が青褪める。自分の身分を明かし、男達に自制を促した。が、

「魔捜？ お嬢ちゃんが？ はは、冗談言っちゃいけないよ。魔捜ってのは大人の捜査官なんだよ。君みたいな子供が捜査官の筈がないじゃないか」

「いやいや、こんな可愛らしい捜査官なら逆に逮捕されたいぞ」

自分の見た目が災いして信じてもらえない。それどころか男達は余計に喜び、腰をさらに強く掌に押しつけてきた。

「お、俺にも頼むよ」

そんな光景に一人残された男が泣き言を言う。

「ん、ああそうだな。じゃあこっちに来てくれ」

魔法使いの男は一旦口奉仕を止めさせると、余ってしまった浮浪者を呼んだ。呼ばれるがままに最後に残った一人が紅音の眼前に立つ。

魔法使いの男のペニスと、浮浪者の肉棒。二本の陵辱棒が突きつけられる。まだ何もしていないというのに、浮浪者の肉先も先走り汁で濡れていた。

(こ、これからアレを？ ま、また？)

想像するだけで寒気がする。喉が渴き、思わずゴクリと唾を飲んだ。

「はあはあ……。こ、こんな可愛いお嬢ちゃんの口でしてもらえるなんて……」

「ちくしょー！ う、羨ましい！」

手淫を受ける男達が勝手なことを口走る。聞くだけで虫唾が走る言葉。

「わ、私の言葉は本当だ。本当に魔捜なんだぞ。こんなことをすればただではすまな——」

「俺達のペニスを舐めて、唾えろ」

歓喜の表情を浮かべる男の口から出たものは、残酷な命令だった。

ゆっくりと身体が動く。口が突きつけられた肉棒に向かって動いていくのが分かった。

小さな口を開き、まずは浮浪者のペニスにキスしようとする。

「おのれえ！ こ、この屑が——んあっ！」

ちゅっ。ちゅっちゅっちゅっ。ちゅるん……。

唇が亀頭に触れた。嫌悪感とは裏腹に接吻が繰り返される。伸ばした舌が肉先にこびりつく恥垢をこそげ取った。

(ふ、うむ……くふう……ま、不味い……)

カウパー液とは比べものにならない苦味が口腔に広がる。だというのに勝手に動く身体はグチュグチュと唾液を分泌させ始めた。恥垢と唾を混ぜ合わせ、喉奥に流し込んでいく。汚い汚物が食道を通り、胃の中へ流れ込んでいった。同時に何故か身体が熱くなる。

さらに身体は積極的に奉仕を行なう。

「んぶ、んんん……ぐ、んもお！」

ちゅぶ、ぶちゅぶ、じゅぶぶぶ……。

唇を割り、口腔へと肉棒を招き入れる。舌にずっしりとしたペニスの重みが伝わってきた。龟头粘膜と口腔粘膜が触れ合い、グチュリと糸を引き、混ざり合う。

「お、す、すげっ！ すげえあつたけー」

「う、うるふあい！ ぐぶっ！ ふげっ！ げほっ！ だ、だまりやぬかあ！」

歓喜の悲鳴を上げる男に、肉棒を咥えたままもごもご怒鳴る。一声発するたびに肉胴に舌が絡み、苦味を含んだ男の味が口腔いっぱいには広がっていった。

「さて、じゃあ僕はこっちで楽しませてもらおうかな」

口を取られた魔法使いの男が、頬に肉先を擦りつけてくる。ネトリツと頬に粘液の筋が残った。ベチャリとした湿った感触が気持ち悪い。

(な、何とか……ふうふう……何とかせねば……)

心ばかりが焦ってしまふ。心なしか舌や手の動きの速度を上げてしまっていた。

「いいぞいいぞ。もっと早く手を動かせ！」

「舌で先っぽを舐めてくれよお」

紅音のそんな焦りは空回りし、男達により強い快楽を与える結果になってしまふ。

じゅちゅっじゅちゅっじゅちゅっ！

手淫を受ける男、口奉仕を受ける男が腰を振り始める。醜悪な肉棒を握らされた手からは、饅えた臭いを発する牡汁が流れ落ちていった。服の袖に染み込み、布が肌に張りつく。

「んごっ！ お、おくっは！ んぼっ！ ふぐっふぐっふぐう！」

喉奥を肉槍で貫かれ、息が詰まった。呼吸困難の苦しみにより、自然と眦には涙が浮かぶ。零れる涎が顎を濡らす。時折肉棒の角度が変わり、喉奥ではなく内頬を突かれたりもした。お陰でプクリと頬が膨らみ、情けない表情を晒すことになってしまふ。

(こ、はあはあはあ……このままでは……)

臭さと苦味と屈辱と……様々な感情が入り混じり、紅音の心を責め立てる。その上……。「何かこっちのほうから妙な音が聞こえ——って、なんだあ？」

夜の公園散歩を楽しんでいたと思われる人間が、物音に釣られて近付いてきた。数は五人。大学のサークル仲間か何かだろうか？

「え、何やってるのよ」

「マジか!？」

女性も含む人々が目を見開いてこの痴態に視線を向けてくる。



(な、こ、こんな……こんなところを……)

男の肉棒に奉仕させられている姿を見られるという事態に、一瞬紅音の心は凍った。これまでこの程度のこと何でもないと自身に言い聞かせ続けてきたのだが、その強気が一瞬で立ち消えてしまう。身が捻じ切られそうな羞恥が身の内から噴出してきた。ただ、それと同時に冷静な思考も組み立てる。

「た、たによむ……んごっ！ げほっ、んぶうっ！ つ、通報しへくれ！ ま、ましように、ましようにちゅうほ——うをっ！」

ぶぐじゅっ！

これまで以上に激しい肉突きが、魔女の喉奥を襲った。必死に助けを求めるのだが、まるで意味を持った言葉をなすことができない。口を開くたびに涎を垂れ流すだけだった。

「げ、ぶげっ！ うええええ……」

「な、なあ……こ、これって通報したほうがいいのか？」

少女が数人がかりで襲われている——そんな光景に人々が顔を見合わせる。彼らの顔に浮かぶ心配そうな表情に、紅音は僅かではあるが希望を見出した。が——

「その必要はない。君達はそこで見物していてくれ。この娘が好きでやっつてることだから」男の口から言霊が飛ぶ。一般人に魔法抵抗力など存在する筈がなく、彼らがあっさりと術中に落ちてしまったことが紅音には分かった。

「好きでやっつてるってマジかよ」

「もしそれがホントだったら最低なんだけど……」

彼らの眉根に皺が寄る。視線に軽蔑の光が灯った。

「ち、ちが——わ、わたひは……」

「違わないだろ？ ほら、今から君が好きなものを出してやるから」

「みんなの前でたっぷり飲んでくれよ」

ニタツと陵辱者達が笑う。と同時に口腔の肉棒が大きさを増した。龟头部が膨れ上がり、気管を塞ぐ。唾液でヌラヌラと濡れた肉回りも太さを増し、ただでさえ押し広げられていた唇がさらに大きく開かれた。顎を濡らす唾液がポタポタ地面に落ちていく。

「んくっ！ ふぐっ！ はっはっはっ……お、おっこ！ ほご、ほごお！」

ぶじゅっぶじゅっぶじゅっ！

くぐもった悲鳴を上げることしかできない。その上、喉奥を貫くピストン運動も激しさを増していった。舌を巻き込み、口腔粘膜を削る。玩具のように紅音の顔がガクガクと前後に揺らされた。長い黒髪が宙を舞う。刹那——

ぶびゃっ！ どっぶっどっぶっどっぶっどっぶう！

「んおごおおおおっ！」

肉先から白濁液が口腔に吐き出された。ビクビクと肉胴が何度も痙攣し、水鉄砲のような勢いで牡汁を吐き出し続ける。撃ち放たれた精液は一瞬で口腔を一杯にし、入りきらなかった分がブビャッと口端から噴出した。

漸く昨日になって仕事に復帰した由梨絵の姿を思い出し、唇を強く噛んだ。

(なるほど。どうやら黒羽さんはぼくが思っていた以上に熱い人みたいだ)

頭の中に唐突に声が響いてきたのは、その瞬間のことである。

(なっ!? だ、誰だ!?)

紅音は思わず瞳を見開き、ギューギュー詰め of 苦しい状態の中で視線を左右に走らせようとしたが、すぐにそれが無意味であることが分かった。

水嶋いずみが薄笑いを浮かべてこちらを見ている。病院で会った時の表情とは明らかに違う。こちらを嘲笑するような顔だった。

(貴様か、水嶋いずみ……本物か?)

(まあね。強制的に黒羽さんの脳内に介入させてもらったよ。貴女は魔女の癖に抵抗力が弱すぎる。ま、それ程強力な封印術を常に使用しているんだから仕方ないだろうけどね)

この言葉にピクッと紅音は反応した。封印まで簡単に把握されてしまっている。どうやら想像していた以上に強力な術者らしい。

(話し方が病院の時とは違うな。それが本来のお主というわけか? その格好やマジックいっちゃんなんて巫山戯た名前には些か不似合いだぞ)

(そんなこと言われてもね。これがぼくなんだから仕方ない)

ワザとらしく肩を竦める。一々の行動が芝居がかっているように見えた。人を小馬鹿にしたような名前を自ら名乗る劇場型犯罪者らしいといえばらしい仕事だ。



(……何故だ？ 貴様は何故我々に近付いた？ 何が目的だ？)

電車の乗客に挟まれながらいずみを睨む。

(目的？ それをぼくが君に話す意味があるのかな？ 刑事である君に話すメリットなんて何もないのに。そんな無駄なことをするくらいなら――)

そこで一度言葉を切る。深く蒼い瞳が妖しく輝いたように見えた。薄気味悪いものを感じ、紅音は身体を硬くする。

(黒羽さんで楽しませてもらうよ)

――え？)

瞬間、突然下腹部に何か絡みついてくるような気がした。思わず視線を下げる。すると足首に黒い影のようなものが纏わりついていた。

それは特定の型を持たないガス状の塊。雲のように掴みどころがない。ゆったりと回転するように、紅音の細足を囲んでいた。ピリピリと痺れるような寒気にも似た悪意が、足を通じて紅音の身体に伝わってきた。魔女である紅音にしか見えない悪意。

(な、なんだこれは？)

(……それはぼくが呼び出した魔物。暗闇の雲だ。ぼくの魔法は召喚術なんだよ)

クスクスといずみは薄笑いを浮かべる。そんな彼女の姿は不気味だったが、同時に紅音は納得することもできた。マジックいっちゃんが様々な犯罪を犯すことができたのは、召喚術という汎用性の高い魔法を持っていたからだとということ。

(呼び出した魔物がいずみの代わりに魔法を使っていたというわけか……)

召喚術者は数が少ない。呼び出す魔物との契約を結ばなければならぬからだ。普通の人間では契約を結ぶ前に食われてしまうのがオチである。

「んあっ！」

唐突に影が動き出したのはその時だった。紅音の思考回路を寸断しようとするかのように、足首から太股に向かってゆっくりと上ってくる。本当に緩慢な動きだった。だが、少女の身を襲う刺激は強く、素早い。ムチュッと舌で肌を舐められるようなおぞましい感触。一センチ、二センチと柔肌を影が撫でるだけで、下半身が脱力しそうになった。背筋が総毛立つ。僅かに肌が熱を発する。淫悦を含んだ刺激が走り、腰砕けになりそうだった。

ほんの少し上げてしまった声で、周囲の乗客が不審そうな視線を向けてくる。感じていられる自分を見られる羞恥に、紅音は何でもない風を装って誤魔化し笑いを浮かべた。

(この魔物……淫気を発しおる。今の私では不味い……)

魔法抵抗力の低い現状では、モロに影の影響を受けてしまう。この状況を脱する為にはどのようなすればよいのか……？

(いつそ身分を明かしてしまえば……)

(それは却下だよ。もし黒羽さんが乗客に正体を明かしてぼくを逮捕しようとするれば、ぼくの魔物が車内の人間を喰らうことになる。それは貴女だって避けたいところだろう?)  
簡単に逆転の手段は撃ち砕かれてしまう。ギリッと紅音は奥歯を噛んだ。

(いや、まだ……まだなにかしゆだ——んがっ！)

「くっ、ふぐっ……ふうふう……」

ガタガタと車体が揺れ、バランスを崩した身体が隣の乗客に押しつけられた。乗客の肘が丁度脇腹にめり込む。淫気によって敏感になっている肉体に、染み渡りような快感が走った。自然と溢れ出た愛液がショーツを濡らす。秘部に濡れた下着生地が張りつく感触が気持ち悪い。身体の反応が信じ難かった。

(な、何故こんな！こ、こんなものっ！)

と抵抗を見せるが、ハアッと口からは甘味を含んだ吐息が漏れる。再び乗客達の視線が向き、反射的に紅音は俯いた。紅くなってしまっている頬を見られたくない。

(少し感じるのが早すぎるんじゃないのか？黒羽さんは淫乱だな。いや、魔搜の人間が淫乱なのか？揃いも揃って敏感すぎるような気がするな)

部下を辱めるような言葉に腹が立った。とはいえ、感じるのが早すぎるという言葉を否定できない。想像以上に淫気が肉体に行き渡ってしまっているようだった。

(せ……はあはあ……せめてこいつを排除せねば……)

取り合えず一旦いずみのことは忘れることにする。まず第一にやらねばならないことは絡みつく影を取り去ることだ。

(し、集中だ。わ、我が魔力を一点に集中させ、る。我を辱めるものに、ば、罰を与えよ) 掌に力を集中させる。実体のない魔物でも、これなら掴み取ることができる。既にスカ

ト内にまで侵入を始めている影に向かって腕を伸ばした。しかし――

(ぬ、んあつ！ んんんん……そ、そこはっ！)

先程まで太股に絡んでいた影がまるで蛇のような形状に変化し、ショーツの上から紅音の秘部に密着してくる。花卉に対して直に淫気を流し込まれるかのような刺激に、伸びかけの腕は途中で止まってしまった。

下着の上で影が這う。上下にシユコシユコと蠢く様は、陰部を愛撫する指のようにも見えた。実体がない筈なのに、ショーツが押し込まれる。秘裂に生地が食い込む。今日の下着も色は白。染み込む蜜でうっすらと陰毛が透けた。

ちゆく、ちゆくちゆく……。

「んふっ、ふぐ、んんん、くむう……」

必死に唇を噛み締める。しかし、漏れる吐息を完全に遮断することはできない。刺すような周りの男達の視線を俯きながらも感じていた。

(あまり大声を出すのは感心しないな。仮にも刑事が公共の乗り物の中で猥褻行為なんかできないだろ?)

(う、んふっ！ はあああ……五月蠅い！)

嘲り笑う声を振り払おうと心の中で怒鳴り返すが、事態の解決には何ら寄与しない。影の動きは激しさを増していくばかりだった。秘裂を一擦りされるたび、理性が削られていくような気がする。

女蜜が溢れ出し、膝が笑う。ともすればこの場に座り込んでしまいたくなる程、下半身からは力が抜けていった。慌てて腕を伸ばして吊り革に掴まろうとした為、艶かしく腰が揺れてしまう。ヒクッヒクッと痙攣するように腰が前後左右に振られ、当然周囲の乗客にぶつかることになってしまった。

「す、済まぬ……う、あんっ……」

そのたびに紅音は律儀に頭を下げる。不審な少女の様子に首を傾げながらも、頭を下げられた男達は満更でもない表情を浮かべた。

(自分から男に腰を押しつけるなんて。黒羽さんは痴女なのか?)

いずみが一々の行動を論う。少女刑事は唇を噛み締めてそれを無視した。

(奴のいいようにされては……。ま、まずはこい、つを引き剥がすことだけを……。はあはあ……か、考えよ!)

自分自身に言い聞かせながら、再び魔力を腕に集中させ、取りつく影に向かって伸ばすが、再び腕は途中で止まってしまった。

「っや! んんっ! だ、駄目だ!」

ぐち、ずちい……。

影の一部が管のように伸び、ショーツの内側に潜り込む。濡れた花卉を直接撫でながら、小さく窄まる菊座に先端部が触れ、そのまま腸内に侵入してくる。

(は、入って——あっあっ! くっる!)

「んおっ！ お、くほっ、あつあつあああつ！ ほおおおおっ！」

影には実体がない筈なのに、直腸が拡張されていく。肛門が無理矢理押し広げられていく感覚に、無意識のうちに紅音は吊り革に身体を預け、爪先立ちになった。身体を上へ逃がそうという意識が働く。が、勿論そんな程度で逃れることなどできはしない。体内に淫気が染みる。

「……………んあつ……………あつ……………」

顔が青褪め、脂汗が噴出した。口はパクパクと開閉し、吊り革を掴んだ手が震える。

「き、君。さつきから様子がおかしいけど大丈夫かい？」

先程から紅音が見せる不審な様子に流石に我慢できなくなつたのか、一人の乗客が顔を覗き込んできた。四十代半ばの会社員といったところだろうか？ 本当に心配そうな表情を浮かべている。

大勢の乗客の中で尻に異物を突っ込まれているという事実を、改めて突きつけられてしまう。羞恥のあまり茹だりそうだった。

「な、何でもない。わ、私はだいじょ——」

だから何の問題もないことをアピールしようとしたのだが、陵辱者はそれを許してはくれなかつた。まるで口を開くのに合わせてようなタイミングで、

ぐぶじゅっ！　ぶぶじゅ、じゅぶるうっ！　ぶじゅぼっ！　ぶじゅぼっ！

ピストンのように管が前後に動き出す。腸管に淫気を染み込ませながら、尻奥にまで先

端部を叩きつけてきた。

「おっ！ んんんんん——おっおっおっおっ！」

肛門に管が突き入れられると、巻き込まれた尻肉が内側に引き込まれる。菊座周辺の皺が伸び、臀部が張るのを感じた。ムジユルツと逆に引き抜かれると、腸管が搦め捕られ、内臓が体外に引き出されるような苦しみが身を襲う。腰も引っ張られて突き出す形になってしまった。

「ちょ、ちょっと君？」

「なんだ？ どうした？」

紅音を中心に周囲の乗客が騒めき出す。

（だ、駄目だ。こんなじ、状況で……目立つわ……けにはいかぬ……）

紅音は何とか冷静さを装おうとした。無理矢理笑みを浮かべ、体勢を整える。影の動きに時折腰をビクつかせながらも、真っ直ぐ立ってみせることくらいはできた。

（わ、私はなん……はあはあ……でもない。し、心配されるよ、うなことは何もな……い）

口を開けば嬌声が漏れてしまう。だから無言のままに自分が異常ないことをアピールしようとする。が、その頬は桜色に上気していた。分泌される汗も、ただの脂汗から甘い発情臭を含んだものに変わり始めている。首筋に浮かぶ玉の汗に、男達の視線が集まった。ゴクリッと誰かが息を飲むのが分かる。

（わ、私を見るな！ んっんっ……み、見るでない！）

恥ずかしさのあまり、俯く。その刹那、

じゅごつ！　じゅぼっじゅぼっじゅごおつ！

「くはっ！　ひっひっひっひ……ふぐう……」

（止まれ！　止まれ止まれ止まれ、止まらぬかあ！）

影はそんな紅音を嘲笑うかのように、ストロークの速度を上げる。直腸が掻き回されているみたいだった。異物の侵入に対し、生理的に腸液が分泌され始める。管に巻き込まれた液体が肛門から漏れ出し、太股を伝って床に向かって流れ落ちていった。下着はぐしよぐしよに濡れそぼってしまう。愛液と腸液が混ざり合い、糸を引きながらポタポタ落ちるのが分かった。傍目から見ると、ヒクヒクと痙攣する少女の姿は異様なものに映る。

（こんな下級の魔物なん……ぞ、ひっ！　お、な、太い。太くなっておる。な、やめ、止めろ！　それは、それはやめ——）

突如として腸内の管が太さを増す。聡い紅音はそれが何を意味するのか一瞬で理解し、必死に尻孔を擦り合わせて衝撃を緩和しようとした。が——

どびゅっ！　びゅぶぶぶぶ、びゅばあっ！

「おひっ！　か、んおお……つ、つめた、んぐっ！　ふうふうふぐう……」

尻に挿入された管の先端から、腸内に粘ついた冷たい液体が注がれる。ドクドクとポンプのように、腸内に淫気の塊のような液体が流し込まれた。下腹部がたっぷり溜まった液体でポッコリと丸く膨れ上がる。腹にキリキリとした痛みが走った。しかも流入はそれだ



けでは終わらず、堰を切ったように腸奥にまで雪崩れ込み始める。眉尻が下がり、キュツと口が引き締められた。今にも泣き出しそうな表情にも見える。

滑る汚液が腸管を洗い流す。粘着質の液体が肉壁に絡み、襞にこびりついた汚物をこそぎ落とす始めた。まるで腸壁を直接舐められているかのような感触を覚える。

ぶじゅ、じゅじゅじゅじゅ……。

「く……んん……あ、ああああ……むぐううう……」

(き、気持ち悪い。んあつあつああつ！ は、腹が、私の腹があ……)

影に向かって伸ばしていた筈の腕で、気付くと下腹部を押さえていた。腹が膨れる程の量を注入され、排泄欲が生まれる。ぎゅるぎゅるとなる腹が恨めしい。

(どうかしたのかな？ 大分顔色が悪いみたいだけど。そんなにお腹なんか押さえて、もしかして黒羽さん——)

「お腹が痛いのか？」

いずみの言葉を引き継ぐように、乗客の一人が顔を覗き込んでくる。心配げな表情。目と目が合う。それが紅音には辛い。思わず視線を逸らし「なんでもない」と答えようとした。が——

じゅじゅじゅじゅ、じゅぶう……。

「んああああ！ こ、これい、これ以上はっ！ や、破れる！ 腹が、腹があ！」

影の淫液注入は止まったわけではなかった。ただでさえ限界に近かった腹が、さらに激

しく張り詰めていく。身体の内側からの圧力。腹の中から身体が破裂してしまうのではないかとすら感じた。下腹部を圧迫される苦しみに、自然と瞳が潤んでしまう。

「ちよつと、本当に大丈夫なのか？ 凄く苦しそうだぞ。ちよつといいかな」

一人の男が心配そうに咬きながら手を伸ばしてきた。腹を押さえる紅音の掌に、男の手が重なる。

(い、一体……うんんん……な、何を?)

疑問が一瞬頭を掠めるとほぼ同時に、男の腕が服の上から腹を押さえつけてきた。

「んぎっ！ こ、こおおっ！ んおっ！ んおっ！」

排泄欲が高まっていたところに加えられる圧力に、少女刑事の口から獣のような悲鳴が漏れる。歪む表情。それを見た男達が口を開く。

「大分張っているなあ。もしかして何か悪い病気か何かなのか？」

「うーん、病気だとしたら不味いですね。この電車は特快だから……次の駅まであと二十分近く止まりませんよ」

「だとすると……ここは私の出番のようだな。なあに、安心してくれ。これでも学生時代は毎日あの名作『ブラックジャック』を読んでいてね。まあ、医者のお卵みたいなものさ」

紅音を取り囲む男達のうちの一人が、ハッハッハと朗らかに笑いながら、さらに下腹部を圧迫してきた。年齢五十代くらいの紳士はトントントと触診するように、指先でそこを叩いてくる。表情だけ見れば、彼らは本当に紅音を心配しているように見えた。

「や、やめっろ！ わ、私はだ、大丈夫だか……ら……あっ、あひっ！」

ベストの上からだというのに、腹を直に叩かれているような衝撃が伝わってきた。腸管に溜まった汚液がタブタブと波紋を作り出す。少しでも気を抜けば、すぐにでも漏れ出てしまいそうだった。必死に拳を握り、括約筋を締める。

(こ、こん……はあああ……な所で……ふうふう……こ、この私が……)

どれ程長き年月を生きてきたとしても、羞恥が消えることはない。乗客達に囲まれた状態で排泄物を漏らしてしまつたら……。考えるだけでおぞましさに身が凍る。

「わ、私からは、離れよ！ わ、私をも、問題なっ！ だ、だからはな、離れねば……」  
(逮捕する——か？ 構わないが、それはぼくが定めたルールに反することになるよ)

冷たい声が響く。開きかけていた口をグッと閉じる。ほんの短いものではあつたけれど、いずみの脅しは紅音の言葉を止めるには十分すぎるものだった。

「おや？ 離れねばどうするのか？ そのコスプレから察するに、逮捕するぞーって感じかな？ 銭形警部みたいに」

男達が馬鹿にするようにゲラゲラ笑うが、言い返すことができない。すると彼らはさらに調子に乗って、小柄な身体に手を這わせてきた。少女の肉体を弄ることに何の躊躇いもない。彼らは顔を真っ赤にし、はあはあと荒い息を吐いていた。

(ま、不味い！ こ、これはまさか……い、淫気の影響が出てしまっているのか！)

秘部に取ついた影から湧き立つ淫気が、車内に充満し始めている。魔法抵抗力を持た

ない一般人では、思考が麻痺してしまってもおかしくはない程の濃度だった。

「お、落ち着け！　れ、冷静になるのだ！　い、一度深呼吸でもし——おとおおっ！　かひっ！　ひっひっ、ひぎっ！」

じゅぐぶうっ！　ぐち、ぐじゅちいっ！

乗客達の暴走を止めようとする紅音を嘲笑うように、直腸内の影が蠢く。汚液の注入を未だに続けながら、挿入運動まで始めだした。

（も、漏らすのだっけはい、かん！　ふっふっふ——い、いかんだ！　あ、くふうっ！）

紅音は括約筋に力を込め、プルプル臀部が痙攣する程大活躍させる。菊座を窄め、ストロークを繰り返す影管を締め上げようとした。が、実体を持つわけではない管にはどんな強い締めつけも無意味でしかない。動きが収まるどころか、逆に速度を上げ始めた。

ずぶじゅっずぶじゅっずぶじゅっ！

「んんっんんっ！　んああああ！」

息む声が管の動きに同調する。吊り革を掴む腕には、震える程の力が込められていた。「何だか震えてるな。もしかして寒いのか？　だったらおじちゃんが温めてあげるよ」

襲い来る排泄欲に震える小柄な身体を見た男が、背後から胸に手を回してくる。掌が平原を鷲掴みにしてきた。乳房などあってないようなものだというのに、揉みしだくように指を食い込ませてくる。制服と指が擦れ合い、衣擦れするような音が響き渡った。

胸を揉まれる、いや、撫でられるたびに、淫欲の刺激が身を駆け巡る。隠れていた乳首

がびよこんと可愛らしく隆起し、制服の上から男の指に押し潰された。

「だ、む、ね……ち、乳房には触れ、る……なあっ！ んひっ！」

乳頭を押されると、身体中から力が抜ける。蜜壺が疼き、自然と太股同士を擦り合わせてしまう。すると男の一人の足が、背後から膝と膝の間に潜り込んできた。無理矢理両脚を開かされる。そのまま男は足を曲げ、太股でショーツの上から陰部を刺激してきた。

「んぐっ！」

べちゅ、ちゅく、くちゅう……。

濡れたショーツから染み出る体液が、男のズボンにも染み込む。

「おいおい、もしかしてお漏らししてるのか？ 不味いどころこんな所で」

ズボンが濡れる感触が不快なのか、男は眉根に皺を寄せる。

「も、漏らしてなどいないっ！」

反射的に紅音は声を荒げた。状況が状況だけに、漏らすという単語に敏感になってしまっている。

「漏らしてないねえ……。こんなに濡れてるのにか？」

ぐじゅっ！

「あっ！ ひきっ！ くいいい——んああっ！」

一人の男の腕がスカート内に入ってきた。ショーツの上からではあるが、指先が容赦なく陰部に触れる。中指で勃起した陰核を押し込まれ、ヒリつくような快感が紅音の肉体を

襲った。小柄な身体が震え、ネクタイが揺れる。脱力感が全身に行き渡り、口端から唾液が垂れ流れた。

尻房からも力が抜けていく。薄桃色の菊座窄みが一個の生物のように蠢き、腸内に溜まった汚液の一部をピュッと噴出した。

「んっ！ ああああああつ！ あひっ！ だ、だつめじゃあつ！」

脊髄から脳裏へと電流が走る。肛門堤防が決壊しそうだった。紅音は股の間の男の足を、両膝できつく挟み込むことによって、排泄欲を何とか抑えた。しかし、膝に力を入れたことで、男の足をスカート内の指が、より激しく陰部に食い込んでしまう。

生地越しに男の太い指が膣口を押さえ込む。淫気によって発情した媚肉は、うねりながら指に絡みついていった。陰唇の形がくつきりと下着に透ける。

この時、再び影がピュッと汚液注入を始めた。

どびゅっ！ どびゆる、びゅぶるるるるう……。

「こ……れ……い、以上はっ！」

ブジュッブジュッと注入の圧力に汚液混じりの腸液が飛ぶ。

「んぐっ！ く、ひっ！ あ、だ、だつめ——ひっ！ ひいひいっ！」

同時に管が回転を始め、巻き込まれた腸管が捻じ切られそうな苦しみが走った。回転によって影管と肛門の間に僅かな隙間が生まれ、ブピッとガスが漏れる。

「お、おい。もしかして今のつてオナラ？」



「わ、わからな——あんっ！ くあっ！ 駄目！ お、お腹がやぶ、破れるっ！」

「分からない筈がないさ。何故なら君は女なんだから。ふふ、まあ確かにぼくだつて初めてそれを子宮に迎えた時は戸惑ったものさ。でもね、一度認めてしまえば楽になる。そう、楽になるんだよ。何故なら君はその母親なんだから」

そう。いずみの言葉通りだった。既に美里は理解している。分かってしまった。腹の中で蠢いているものが、豚の精液によって受精してしまった自分の子供だということ。「ち、ちがつ！ ちがつう！ ひきっ！ きゅううんっ！ あっあっあああっ！」

くねくねと剥き出しの尻を振りながら、女署長は敵の言葉をそれでも否定した。認めることを理性が拒否する。

「違わないさ。間違いなくお前の子だ。私が透視したんだから間違いない。お前自身の魔法で成長していることがその証だ。私の強制魔術発動魔法の威力はなかなか凄いだろう？」

一体どれだけの魔法使いを誘拐し、その能力をコピーしてきたのだろうか？ 片桐は得意満面の笑みを浮かべていた。

「は、母親なんか……じゃ、なっひ！ わ、わたっしは、違うっ！」

ポプカットを揺らしながら、何度も首を左右に振る。たとえ何を言われたとしても、これだけは認めるわけにはいかなかった。だが、否定している間にも胎内の異物は成長している。妊婦のように丸々と腹が膨れていく。下腹部の肉が突っ張った。視界が歪む。子宮壁を異物が撫で上げると、否定しようのない淫悦が身に走った。



「へ？ あ、む、胸が！ わ、私のお、オッパイが！ ん！ んんんんっ！」

乳房が張り詰めていくような感覚まで覚える。何が起こったのかと一瞬間に思った次の瞬間には、床に押しつけた乳頭からビュブッと乳液が噴出した。プルプルと乳肉が弾む肉体を弛緩させる甘い射乳感に、美里はだらしなく口を開いた。

「な、なんで？ ぼ、母乳？ いや、何で？ やっ！ 何でおっぱいでって!? いや、いやあっ！ こ、こんなの——」

「子供ができれば母乳も出るといふものだよ」

「ち、ちがふっ！ ふうううっ！ 豚を、豚なんかを孕んではいなひっ！ んっんんんんんんんっ！ あっ！ ち、違う違うっ！」

上半身を土下座するように床に押しつけ、首を振り、子供のように泣きじゃくる。

腹の中の異物はいよいよ大きさを増す。膨れた腹が内部からポコポコと動いているのが見て取れる程になっていた。

「君に種付けしてくれた奴が来てくれたよ」

豚が近付いてくる。彼らはブヒブヒと鼻を鳴らしながら、その首を代わる代わる下腹部に押しつけてきた。まるで妊娠した子供を慈しむ父親のような態度である。

「畜生にも親心というものはあるものなのか」

「まあね。どんな生き物でも親になるってのは嬉しいものさ。ぼくだって孕むまでは魔物の子供なんて最悪だ……としか思っていなかったからね」

世間話のように片桐といずみは言葉を交わす。この話の内容から、いずみも過去に魔物による陵辱を受けていたらしいことが分かった。もしかしたらいずみはそのせいでこんなことを……。とはいえ、分かったところで現在の美里には何かできるわけではない。

「おしっ、おしっつけるなあっ！ ひぎっ！ きっひぎっ！ くっ、苦しいからあっ！」  
豚にとっては愛しい我が子に対する愛情表現なのだろうが、女署長にとってはただの圧迫行為でしかない。膨れた腹が巨大な豚頭に押され、手足先がピンッと伸びた。開いた口から伸び出した舌に、吐瀉精液が絡みつく。

「や、で、でるっ！ おしっこ、オシッコ出ちやうっ！ ひっ！ や、やああっ！」

圧迫された内臓に膀胱が潰され、シヤアアッと尿が飛んだ。

「うわっ！ こつちにまで尿がかかるぞ。ぼくの一張羅が汚れてしまうじゃないか」

「はっはっは、これこそまさしく『シヤアが来る』だな」

くだらない駄洒落を飛ばす片桐。少し困ったような笑みを口元に張りつかせ、研究員達が愛想笑いを浮かべた。

そんな連中に見つめられる中で、遂に子宮口が押し開く。ズルリッと落ちるように子宮内の巨大な異物が膣道に向かって這い出し始めた。

「んおおっ！ だ、だめっだ！ 違う！ 違うんだ！ あぐっ！ ぐっ！ くるっ！ お、おおおっ！ こ、これは違うのよおっ！」

胎内の異物が何であるのか、心の奥底では理解している。それでも、想像すると寒気が

走った。残った力で蜜壺を締める。体内の異物をそれ以上出すまいと「んーんー」と必死に息み続けた。

しかし、力は持続してくれない。異物が少し膣壁を擦るだけで、肉体は簡単に淫悦に咽び泣いた。頬が紅潮し、上半身までくねらせ始めてしまう。乳首が床に擦りつけられる感覚が堪らなかつた。コリコリッと冷たい床に乳頭が転がされるたび、熱い乳液が迸る。発情臭が肉体から漂い、分泌される汗が火照った身体を流れ落ちていった。自分の身を襲う感覚の意味が分からない。恐ろしい筈なのに、どうして気持ちいいと感じてしまうのだろうか？ 私はどうなってしまったのだろうか？ 自分自身が分からなくなっていた。

肉体は限界に近い。パクパク口を開閉する膣口から溢れ出る愛液は、流し込まれた精液など関係なしに白濁としていた。ゆっくりと内側から花卉が開かれていく。冷たい空気が膣中に流れ込んでくると、襲の一枚一枚がキュウツと収縮し、蜜壺内の異物に絡んだ。その上で異物が膣口に向かってヴァギナを進む。ポロポロにドロドロに汚れた顔が、歡喜に歪む。半開きになった口からは、愉悅の吐息が漏れていた。肉体は昂ぶり続ける。

「お、お願い！ ホントに、ホントにこ、これだけっは！ はぐっ、んくあぁっ！ こ、怖い！ 怖いのおっ！ ひっ！ いんんんんんっ！」

これまで感じたこともないような絶頂感が膨れ上がってきた。嘔み締めた唇。震える媚肉。自分自身のすべてが包まれてしまうのではないだろうか？ そうなった時、自分は自分のままでいられるのだろうか？ 純粹に美里は恐ろしかった。

「怖いことなど何も無いさ。新しい命を育む……これは素晴らしいことだと思うだろ？」  
「お、おもわなつい！ おも、おも、お……おとおつ！ ひ……ろ……ひろがる！ わ、私のあ、アソコが、あつそこがあつ！」

「アソコじゃ分らんなあ。名前を言ってくれないと、助けようにも助けられないぞ」  
片桐の野次が耳に届く。勿論彼に美里を助ける気などサラサラないのだろう。普段の彼女であればすぐに分かることだ。が、今の彼女にそれだけの判断力はなかった。この状況から救い出してもらえるのなら、なんでもできるような気さえしていた。

「マ○コ！ オマ○コやぶれ、やぶれつちやうのおつ！ たすけ、たすけへえ！ あ、あぐぐぐぐ、んぎいいいっ！ ひぎっ！ ひぎいっ！」

耐え難い痛みと快楽。開いた蜜壺から、赤黒い生物が顔を出し始めた。白く美しく瑞々しい女の肉体とは対照的な醜悪な生物が生まれ出る。ブーブーという鳴き声が聞こえた。

「やつ！ やあああああああああああつ！ ひいっ！ たすけ、助けて！ たすけでえ！ 紅音、紅音え！ 師匠うううっ！ こんなのやだ！ やだあああつ！」

「へえ。師匠か……どうやらぼくが思ってた以上に、黒羽さんと関係が深いみたいだね。これはいい。そら、もつと強く泣き叫んで黒羽さんと呼ぶんだ。君が苦しめば苦しむ程、黒羽さんの怒りもきつと強くなる筈さ」

「やぢやあああつ！ たしゆけて、たしゆけてひひよおとおつ！」

そんないずみの言葉も耳に届かず、半狂乱になって泣き叫ぶ。白濁液、汗と涙と鼻水で

美しい顔はグシャグシャだった。

「産まれる！ わだしのマ○コから豚が、ぶだがあああつ！ にやんで？ にやんでぎもちいのつ！ こんなやなののに！ 嘘なのに、現実じゃないのにつ！ なんで、なんでごんなにつ！ おつ！ おおおおおつ！ いぐつ！ やらつ！ わだし、わだしいつ！」  
嫌な筈なのに、最低な筈なのに、桐谷美里は心の内でどこか満足感を覚えてしまう。豚が外界に産まれ出ていく感覚に、安らぎのようなものすら覚えた。その感覚が性感に直結し、肉体を絶頂の高みまで押し上げていく。

豚が顔を出す腰が振りたくられる。その様はまるで挿入された肉棒に膣奉仕しているようにさえ見えた。扇情的に揺れる腰から汗と愛液と白濁液と尿が飛ぶ。そして――

ミヂ、ミヂミヂミヂミヂミヂミヂイッ！

「おお、んくあああつ！ ひいっ！ う、産まれるっ！ う、産んでイク！ ひぎいいいっ！ 私ばけもろ産んでいくうっ！」

高みに上った肉体が弾けたような気がした。身体の奥底から湧き上がってきた快樂に、全身が飲み込まれていく。張り詰めていた糸がプツンッと切れ、視界は閃光のような白へと変わった。思考が途切れる。気持ちよさだけが肉体を構築するすべてのようにさえ思えた。背中が弓形に反り、女署長は出産によって達する。

ブジョバアッ！ ボドッ！ ブジジイッ！

「あ……あひっ！ ふえええ……あ、あへへへ……ひーひー」

恐ろしい程の脱力感だった。フーフーと息ばかりが辺りに響く。暫く虚脱感に包まれていると、何かが足に絡んできた。

「おぐっ！ あ、わ、わらしの……あかひゃん……」

産まれ出たグロテスクな豚の赤子。大きさは子犬程はあるだろうか？ 美里の体液に塗れ、キラキラと輝いているようにさえ見えた。

「あ……わ、わたし……わたし……」

開ききった腔口。粘着糸が伸びながら床に落ちていく。肉襞は充血したように真っ赤になつていた。瞳は蕩け、開いた口からは舌が伸びる。時折ヒクヒクと白い肌が痙攣した。

突き上げていた腰が落ちる。ヒクヒク震えながら、美里は意識を闇の中へと落とす——  
ちゅぐっ！ ぶじゅぽおっ！

「ひぎっ！ か、あんんっ！ やっ！ らつめ、らめえっ！」

すことは許されなかった。産まれたばかりの豚が、肉棒を勃起させて母親の身体にのしかかってきたのである。ヴァギナの中に再び挿入されるペニス。ハッと振り返ると、既に豚は成体と同じ程の大きさになっている。

「ふふ、その豚は牡しか生まれないんだ。それにしても……高速魔法の効果が生まれてからも出ているとはね。こんなに早く成長するとは。これならすぐに新しい子供を作れるよ」  
ずじゅっずじゅっずじゅっ！

「い、いまっは！ 今はだむえええっ！ あっあっ！ お、おぎっ！ んいいいっ！」









その霧は工場内で一つの雲のように集合していき、口から霧を吐き終わった頃には一つの巨大な影となっていた。

工場内に漂う黒い瘴気。まだ悪魔としての姿を完全に取り戻してはいないが――

「あ、ああああ……」

不老の魔女は呻く。それは間違いなく八百有余年前、突如現れ、数百、数千、数万の間を食い殺した悪魔だった。

「す、凄い。なんて、なんて禍々しい気なんだ。これが、これがぼくの求めた……」

「そ、想像以上だ。これは……研究のし甲斐がある……」

部下の死すらも喜びに変え、二人の犯罪者は喜びに表情を歪ませる。片桐は犯している暇などないとはかりに、じゅぶりつと肛門から肉棒を引き抜いた。

「あんっ」

ペニス引き抜かれると、パンパンに堪っていた白濁液が噴き出る。悪魔を復活させてしまったことに呆然としながらも、下腹部に異様なまでの物足りなさを感じていた。何か足りない。自分を埋めていたものが、なくなってしまう。紅音は何故だか妙に寂しい心持に襲われてしまった。

「おお、遂に、遂にやったぞ……」

勿論片桐はそんな想いなど歯牙にもかけてくれない。物欲しそうな表情の紅音を無視するように、悪魔へと近付いていき――

ぶじやあああああつ！

「断末魔の悲鳴すら上げる暇なく塵に変えられた。片桐がそこにいた証となる肉の一片すらも残らない。」

「す、凄い凄く凄く。この凶暴性、凶悪性。ぼくが想像していた以上だ」

片桐が死んだことなど気にもせず、いずみは興奮気味な声を上げる。そんな彼女を見ながら、紅音は漸く回り始めた頭で冷静に状況の分析を始めた。

（ま、まだだ。はあはあはあ……ま、まだ問題はない。や、奴の力は復活したばかりでまだ……ひ、低い。影のまま形も維持できていない今なら……まだ封印することは可能だ）

とはいえ、自分独りの力では手も足も出ない。過去に封印した時も、仲間の力を借りてやっとなるところだった。そこで紅音は繋がり合ったままの美里を見つめる。既に片桐はこの世にない。ということはずまり、

「美里！ わ、私に力を貸せ。奴を封印するぞ」

洗脳魔法は解けている筈だ。だから視線を合わせて話しかけた。だが、美里は予想とは違う反応を見せる。淫猥に呆けた視線をこちらへと向けてきた。

「ご、ごめんなひゃい。とまりやないの。こひがとまりやないのよお！」

「な、何をつ!? ひっ！ あっあつ！」

ぶじゅぐつ！

正気には戻っているのかも知れない。だが、美里は快樂に支配されてしまっていた。まるで猿のようにピストン運動を再開する。そして抽送を続けながら紅音の胸元に手をかけてきた。そのままプチプチッと魔装を引き裂いてくる。露にされる乳房。普段の平原とは違い、豊かな起伏を持った柔肉がプルッと揺れた。乳首は勃起し、ヒクヒクと痙攣する。

「なっ！ や、やめよっ！！ し、しっかりしっろ！ んあっ！ こ、ここっろを鎮め——  
ひあっあっあっ！ や、やだあ！」

散々辱めを受けてきたが、羞恥が消えることはなかった。紅音は少女のように顔を真っ赤に染め、首を横に向ける。

「おいひそう！ ああ、しゅごく、しゅごくやわりやかいよお！」

恥ずかしがる紅音の様子を気にも留めず、美里が胸を揉みしだいてきた。同時に腰も動かし始める。先程までと同じ高速ピストン。

ぶじよっぶじよっぶじゅっ！

ピストン速度に合わせて愛液が飛び散っていく。

「このようなことやめ——あっ！ あへっ！ あへっあへっあへっあへっ！」

膣奥にペニスを突き入れられただけで、紅音の口は半開きになり、睨はとろんと下がる。「ふふ、どうやら桐谷美里は君が思っていた以上に壊れていたみたいだね。ぼくの目的が叶った祝いだ。淫らな踊りを見せてくれよ！」

一心不乱に腰を振る美里の様子に、いずみは何度も手を叩いて喜ぶ。歡喜を抑えきれな

といった様子だった。だが、そんな彼女の喜びは唐突に途切れることとなる。

「ん？ なんだ？ な、何をっ!？」

片桐を消し去った後、工場内を浮遊していた悪魔から、黒衣の少女に向かって触手が伸びた。先端部が亀頭のように膨れ上がった触手が赤黒い肉茎を蛇のようにうねらせる。唐突な出現にいずみは反応する間すら与えられず、胴をあっさりと縛られ、拘束された。

「は、放せっ！ ぼ、ぼくがお前の封印を解いてやっただぞ！ は、放さない——か！」  
ジタバタもがき、怒鳴りつけても悪魔は止まらない。それどころか抵抗するいずみの様子に喜ぶように瘴気が震えた。

やがて影から、蛇の舌のような触手が伸びる。軟体動物のように黒衣に絡みつきながら、やがてはスカート内に侵入を始めた。肉舌先がやはり黒いレースのショーツを突く。

「ひゃっ！ や、やめっ！ やめないかっ!？」

悪魔の前では、散々紅音達を弄んできたいずみもただの少女でしかなかった。触れた肉紐から分泌される粘液が、ショーツを溶かす。悪魔の触手がスカートを捲り上げ、秘部が露になった。

少女状態の紅音とさして変わりが無い幼い秘裂。陵辱行為を見てきたことで興奮したのか濡れてはいるものの、まるで処女のように美しい陰部だった。

「やめろ！ ぼ、ぼくから離れる！ 放すんだよっ!？」

一瞬表情に恐怖が浮かぶ。どうやらいずみは呼び出した悪魔を制御できると考えていた

らしい。だが、現実には彼女の想定からは大きく外れていた。

悪魔は何の容赦も躊躇もなく、肉先をいずみの蜜壺に添える。幼い膣口に対して、あまりに巨大すぎる肉触手。

「む、無理だ！ そんなの挿入<sup>はい</sup>する筈がない。やめ、壊れる。ぼくが壊れるっ！」

少女は首を振って拒絶の言葉を何度も吐くが、理性を持たない悪魔は止まらなかった。膣口に押しつけられた巨棒が前進を始める。

ミヂッ！ ミヂミヂミヂミヂイッ！

「ひぎっ！ ぎひいっ！ おっぎ、おっぎすぎるうっ！ ひいひいっ！」

引き裂かれるように秘裂が押し開かれた。ポコッと肉棒の形に下腹部が膨れる。楔でも打ち込まれているかのような姿だった。腫は痛々しい程に見開かれ、顎が外れんばかりに開けられた口からは悲鳴が漏れる。

そんな彼女をさらに嬲らんとするかの如く、悪魔の影から幾本もの触手が出現した。伸びる触手は乳房を締め上げ、口腔に侵入していく。枝分かれするように伸びる触手は、肛門にまで触れ、陵辱を開始する。

乳房に食い込む肉洞。太股を触手が螺旋状に縛り上げていく。触手の体表からは汁が溢れ出し、漆黒のドレスにグチャグチャと染み込んでいった。ぴっちりとしたドレスが肌に張りつく。

「むびっ！ んぶっ！ んぶうっ！」

細い触手が耳の中にまで侵入していった。生理的な現象なのか、見開かれた瞳から涙がポロポロと零れ落ちる。先程まで見せていた余裕が、一瞬で消え失せてしまっていた。

あつさりと悪魔の前に陥落するはずみ。本来であれば逆転のチャンスなのだが……。紅音には彼女の状態を観察する余裕もなかった。

「あかにえ、あかにえ、あかにええええっ！」

美里が発情した犬のように腰を振りまくる。

「やめっ！ やめひよ！ ひやめ——ま、まひやはひつてくりゆううっ！」

ヘコヘコと何度か腰が動いたかと思うと、膣中で爆発する白濁液。精液の海の中に沈められているような錯覚すら覚えた。それでも美里を止めようとする意志を保ち続ける。これが紅音にとっての最後の矜持だった。

しかし、その努力を嘲笑うかのように、悪魔の影から伸びた肉触手が絡みついてくる。生温かく、腐臭が漂う肉の塊。そんなものが手足に絡み、乳房を締め上げてきた。

「な、んだ？ なんっただこりえはあ！ ひっ！ から、かりやむなあ！」

グチュッと肌に食い込んでくる感覚が不快であり、鳥肌が立つ。胸元に痛みが走る程の力が込められ、乳房は簡単に形を変えた。紅音は身を振って逃れようとするのだが、それ以上の速度で触手が身を縛ってくる。溢れ出る体液が身に染みる。熱気を伴った生温かい感触が、昂ぶる肉体をさらに押し上げていくように感じた。

「うえっ！ やっ！ ひぎっ！ は、挿入って、挿入ってくっするう！ おっき、おっきい

いいいっ！」

触手は蠢き、美里の身体まで縛り始める。愛液でびしょ濡れになった膣へと肉先を沈めていく。快樂に溺れる美里は、それだけで軽く達してしまったようにも見えた。實際肉棒を突き入れられた蜜壺からは、大量の愛液が噴き出す。粘る女液は紅音にまで吹きかかった。

「あっ！ ひっひっひあっ！ あーあーあー！」

だらしなく歪む表情。それでもピストンを止めようとはしない。自身の肉壺を犯される悦びに浸りながら、さらにペニス挿入の快樂に溺れる。

美里の身体に絡みついた触手は、彼女のヴァギナを犯しながら幾重にも枝分かれしていく。菊座を犯し、太股を縛り、紅音と結合する肉棒にまで絡みついてきた。肉茎上を螺旋を描くように移動し、結合部に近付いてくる。膣壁と触手、二つの圧迫を受けた肉棒は、何度も何度も激しく痙攣を繰り返した。ビクンビクンッと膣内でバネのように跳ね回る。

「いっくっ！ あっ！ しま、締まって、しまっへでふうっ！ ひっひっひ、ひぐうっ！」  
「おっ！ くひっ！ も、だ、だっすなあっ！ あぐっ！ ひぎっ！ ひ、ひらっく、わらしのあしよこがひらくうっ！」

細い触手に肉胴を圧迫され、美里の射精速度がさらに増す。染み渡る熱液。それだけで思考回路は焼き切られ、最後の矜持さえも消し飛ばされそうに感じた。子宮が疼き、身体中に蕩けるような淫悦が走る。その上、美里の肉棒に絡みついた触手まで胎内に侵入して





きた。

じゅずぼっ！ ぶじゅぼっ！

「おっ！ おっおっおっおほおっ！」

下腹部がいつ破裂してもおかしくないように思える。そしてその苦しみさえも肉体は愉悦として受け取っていた。身体中が火をつけられたかのように熱い。

螺旋を描く肉紐が、腔壁を抉り、引つ張る。肉体と精神が壊されていくかのように感じた。

腔道が内臓を圧迫しかねない程に拡張される。既に膀胱は押し潰され、止め処なく尿が流れ出ていた。

「いぐっ！ いぐっいぐっいぐうううっ！」

絶頂が止まらない。美里の腰が動くたび、触手が胎内で回転するたび、紅音の肉体は簡単に達した。最早魔女の肉体は肉欲の悦びから逃れることはできない。

いや、紅音だけでなくこの場に残った女全員が、愉悦の海に溺れていた。

「もごっ！ ほごっ！ んもおっ！ げふっ！ げぶうっ！」

乳房と外れかけのヘッドドレスを揺らしながら、いずみが呻く。腔口、尻穴、口腔、耳、臍、鼻——有りともらゆる穴を悪魔に犯されながら、水嶋いずみは腰を振り続けていた。

口腔の触手が食道を突く。膨れる喉。時折ゲブゲフと息を漏らすたび、口端から白濁混じりの胃液が溢れ出た。綺麗だった顔が、汚物に塗れる。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**